

## 東寺講堂諸像の機能と『金剛頂経』

東北大学 原 浩史

東寺講堂諸像は、承和6年(839)に開眼供養が行われた平安初期を代表する木彫群像である。従来、五仏・五菩薩・五大明王・梵釈四天王の計二十一尊からなるその尊像構成は金剛界法と仁王経法によるものと考えられてきた。しかし、金剛夜叉明王を含む五大明王の構成は不空訳『仁王念誦儀軌』と一致せず、平安時代、東寺講堂において仁王経法が行われた形跡もない。その尊像構成の意味については、再考の余地があるように思われる。

平安時代に講堂で行われた仏事としては、修正、諸尊日供、安居講が知られる。しかし、表白に諸像への言及があることから、承和13年もしくは14年に実慧によって始行された伝法会も講堂で行われた可能性が高い。諸像はこの法会において供養の対象になっていたものと考えられる。伝法会はその名の通り、真言宗の経軌を講じて法灯を次代へ伝えるために行われたと考えられ、衆生を救済することの出来る真言僧の育成がその目的であったと思われる。とすれば、諸像は即身成仏を目指す真言僧のためのものだったはずである。

そこで、あらためて諸尊の図像を確認すると、金剛波羅蜜菩薩像の持物を不空訳『仁王経』の説く輪とする説には、明確な根拠のないことに気がつく。康和・長治年間の修理の際に金剛薩埵と誤認されていることをふまえるなら、当初は金剛杵であった可能性の方が高いだろう。一方、五仏が乗っていたとされる鳥獸座は、八十一尊曼荼羅や『五部心観』には描かれ、『金剛頂瑜伽中略出念誦経』に説かれるが、現図や不空訳『真実撰経』には見られない。しかし、『金剛頂経開題』等の著作から考えると、空海にとっての『金剛頂経』が『金剛頂瑜伽経十八会指帰』に説かれる広本の『金剛頂経』であったことは疑いない。『略出念誦経』も含めた複数の経軌が、全貌を知り得ない『金剛頂経』の一部とみなされていたのである。

これをふまえると、『仁王念誦儀軌』が五菩薩・五大明王を説く部分で、「三蔵所持」の「梵本金剛頂瑜伽経」を典拠として挙げているのは興味深い。つまり、五大明王の典拠も『金剛頂経』にあるとみなされた可能性が高いのである。とすれば、東寺講堂の主要十五尊は、広義の『金剛頂経』を典拠として構成されたことになるだろう。

『大日経』などの諸密教経典が忿怒尊の役割として説くのは、行者の障を除くこと、煩惱を断じることである。観賢撰とされる『五大明王義』が、五大明王について断惑をあらわすものと説くのも、五大明王が初期真言密教において果たした役割を継承するものだろう。修行の最終目標である五智をあらわす五仏と、修行の階梯に密接に関わる五菩薩・五大明王を供養することが、真言僧たちにとって特に意味のあることだったのは間違いない。

図像と経軌から通説とは異なる尊像構成の典拠を示した上で、法会の目的と空海の経典理解に沿った諸像の機能について明らかにすることが、本発表の目的である。